

令和 8 年 7 月 2 1 日

令和 7 年度 特別の教育課程の実施状況等について

滋賀県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
米原市立春照小学校	米原市教育委員会	公立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
米原市立春照小学校	https://suijyou-e-maibara.edumap.jp/files/download/1723

※必要に応じて行を追加すること。

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
米原市立春照小学校	https://suijyou-e-maibara.edumap.jp/distinctive-activities	https://suijyou-e-maibara.edumap.jp/distinctive-activities

※必要に応じて行を追加すること。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

☒ 計画通り実施できている
☐ 一部、計画通り実施できていない
☐ ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

☒ 実施している
☐ 実施していない

<特記事項>

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本校は田舎の小規模校であり、外国の方と交流する機会はあまり多くない。子どもたちは素直で真面目であるが、人数が少なく単級のためクラス替えがなく、人間関係が固定化しやすい。互いに切磋琢磨する雰囲気は乏しく、言われたことは真面目にやり遂げようとするが、積極的に人とかかわったり発表したりすることが苦手な児童が多い。そこで、英語科の学習を通して、子どもたちが自信をもって、積極的に人とかかわる力を育成することが大切であると考え、取り組みを進めてきた。

ALT と担任による指導で、英語科の授業に安心して親しみをもって参加している様子が見えてくる。そして、ALT やデジタル教材の使用により、ネイティブな英語の発音を聞き、音声で慣れ親しんだ英語をもとに意味を推測し、活動する様子も見られるようになった。

英語に関わる児童評価では、「英語の学習に楽しんで参加していますか？」という設問に79%が肯定的な評価をしている。また、「小学校で英語の学習をすることは、大事だと思いますか？」の設問に対して、児童評価は81%以上、保護者評価でも96%以上の評価をいただいております。英語教育への関心の高さがうかがえる。(評価は、「そうだと思う」・「ややそうだと思う」の割合を表している。)

課題としては、英語専科の教員がいないため、担任の英語の指導力の差があげられる。ALT とともに授業を行う時は互いに補い合いながら進めることができるが、発音など、不安に思う教職員も少なくない。今後、教師の英語の指導力をどう高めていくかが課題である。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

全国学力学習状況調査質問紙調査結果では、「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか」、「自分には、よいところがあると思いますか」、「将来の夢や目標を持っていますか」、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」の項目で以前は全国の児童より下回っている様子が伺えた。しかし、ここ5年間の推移をみると、全体的な傾向として肯定率の高まりが徐々にではあるが見られるようになった。また「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の項目に関しては、肯定的な回答をしている児童の割合が80%を超えており、社会に貢献したいと思う児童の割合が高い。英語科の取組や他の学校生活での活動を通して、子どもたちが自信を高め、何事にも積極的にかかわろうとし、自己肯定感や自己有用感の育みにつながっているように感じている。

4. 課題の改善のための取組の方向性

一つ目に、教師の指導力向上を図っていくことが課題である。それを改善するためには、教職員の研修機会の保障、教材の発掘、ICT機器の活用などがあげられる。指導者一人ひとりの英語力を高めることは最も大切な改善策であるが、指導者の英語力を補

えるような教材を発掘し、ＩＣＴ機器を活用することで、授業改善を図っていくことが必要と考える。

二つ目に、小学校における英語科の効果的な評価の在り方も課題である。実践を重ねながら目指す児童像やその具体的な姿を話し合ってきた。今後、さらに児童の発達段階に応じた具体的な姿を検証していくなどして、指導と一体となった効果的な評価の在り方を求めていくことが必要である。

三つ目に、小中の連携も課題である。小中相互の授業参観をするなどの交流をしたり、小中合同の交流学习をしたりするなど、小中連携によるさまざまな取組を模索していくことが大切である。そして、小中の教員がそれぞれの指導の実態や課題、成果などの情報を共有したり、一緒に学習活動を計画・実践したりすることにより、小中のつながりを意識して児童の実態やニーズに応じた指導を行っていく必要がある。